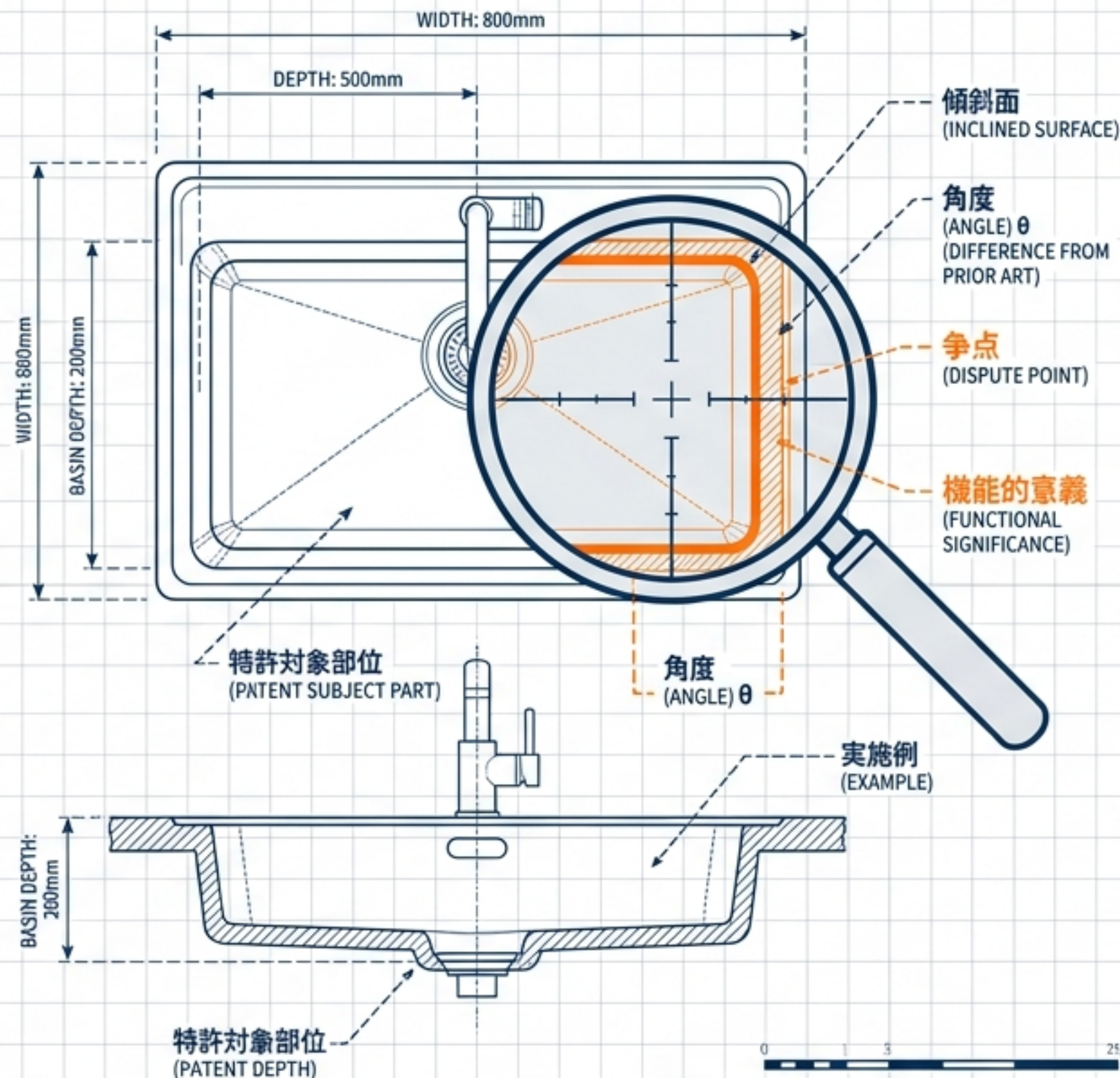


# 「傾斜面」はいかに 解釈されたか：流し 台のシンク事件から 読み解く特許法 70条の境界

知財高裁平成23年1月31日判決・  
平成22年（ネ）第10031号

・クレーム解釈における幾何学的形態と  
機能的意義の衝突



TITLE	TITLE
PROJECT	PROJECT
PROJECT	SCALE
DATE	1/16/11

# 事件の全体像と控訴審における劇的な逆転

特許庁判定  
(非属)

東京地裁 - 原審  
(非充足)

知財高裁 - 控訴審  
(充足)

1	当事者	トーヨーキッチンアンドリビング株式会社 (控訴人) vs. 株式会社松岡製作所 (被控訴人)
2	対象製品	システムキッチン用シンク「3StepSink」
3	中心争点	構成要件C1「傾斜面」の充足性
4	結論	原審(非充足)の判断を覆し、 被告製品シンクにつき <b>文言侵害を肯定、 差止め・廃棄を認容。</b>

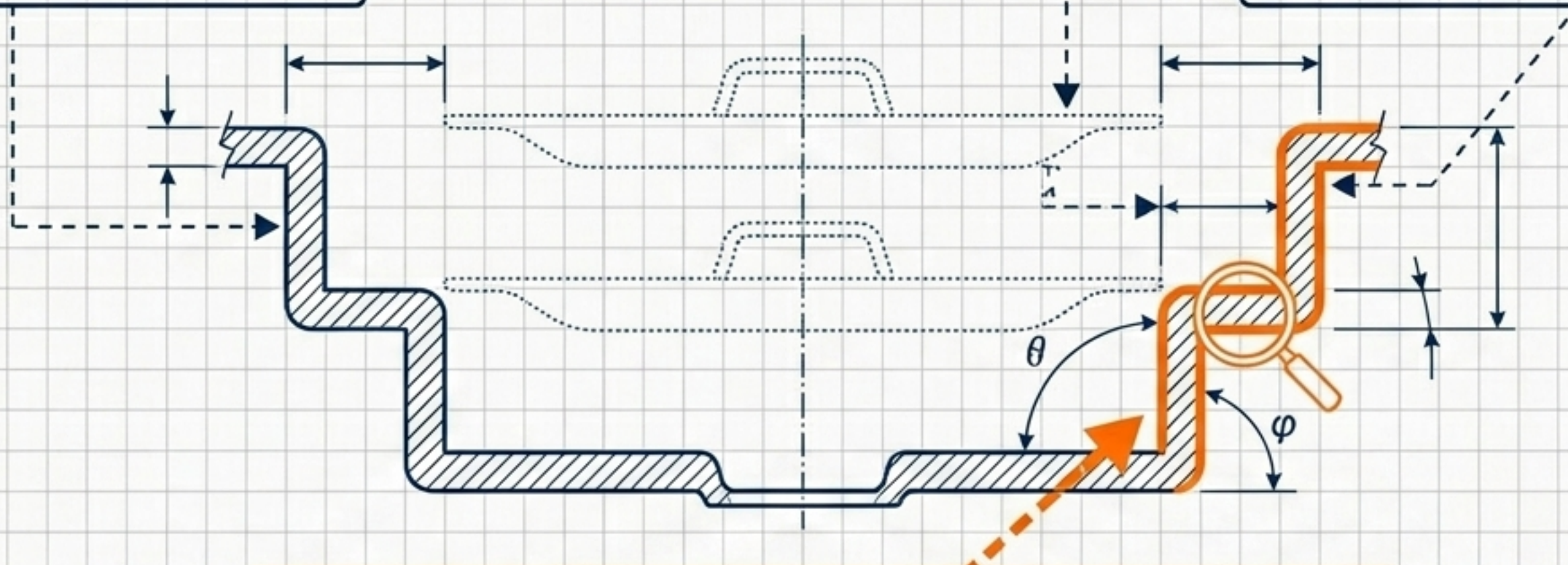
# 特許発明の解剖図：機能と形状の交差点

## A1 (段部構成)

前後の壁面の上部に上側段部、  
深さ方向中程に中側段部が形成。

## B1 (機能的構成)

同一プレートを掛け渡せるよう、  
両段部の前後間隔がほぼ同一。



## C1 (形状構成 - 本件の核心)

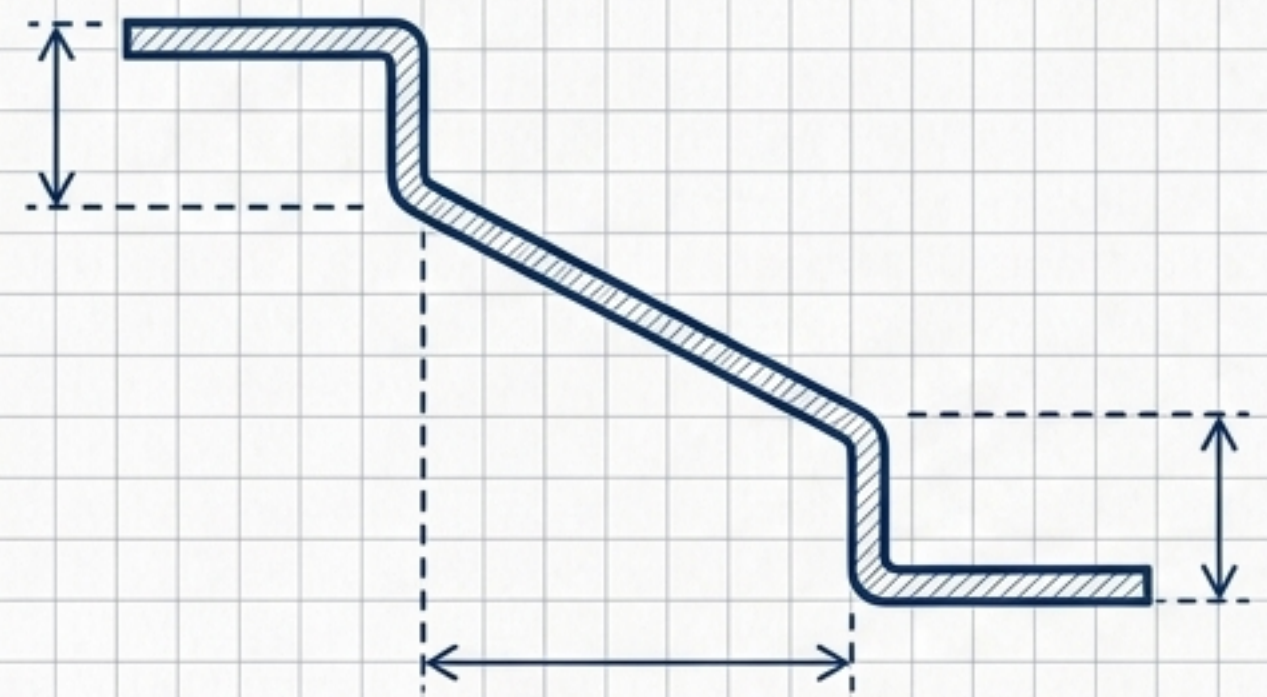
後方側壁面は、上側段部と中側段部との間が、下方に向かうにつれて奥方に向かって延びる「傾斜面」となっている。



# 物理的現実との摩擦：被告製品は「傾斜面」を有するか

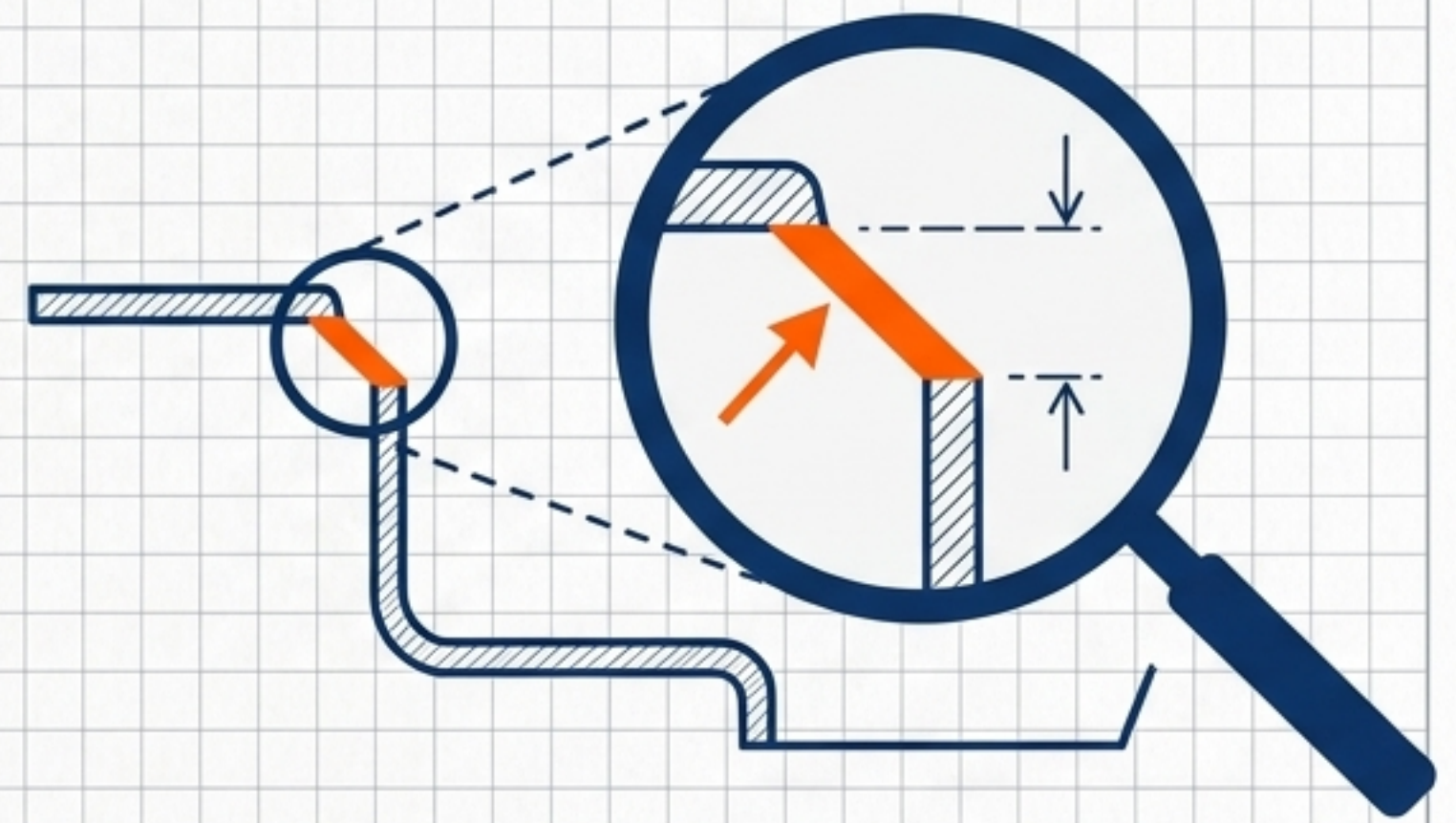
問われる定義：一部の傾斜面で足りるのか？全体が傾斜面である必要があるのか？

特許発明の実施形態



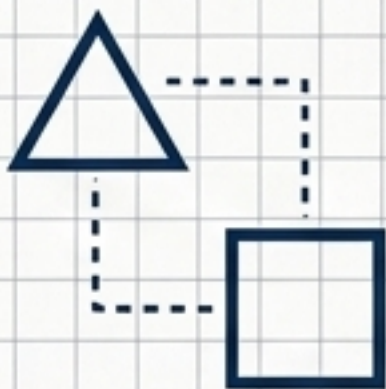
段部間の全体が傾斜面として描かれている。

被告製品 (3StepSink)



上段リブの下部に短い傾斜面を有し、その下方に垂直面が続く形状。

# 3つの解釈基準：幾何学的形態 vs. 課題解決機能



特許庁判定（非属）

## 【主たる部分基準】

全体として見たとき、主たる部分が傾斜面であることを要求。被告製品の主たる部分は鉛直面と評価。



東京地裁（原審・非充足）

## 【空間形成基準】

奥方へ一定の広がりをもつ内部空間を形成する面積・角度が必要。上側段部下面のみの傾斜面では不足と評価。



知財高裁（控訴審・充足）

## 【機能実現基準】

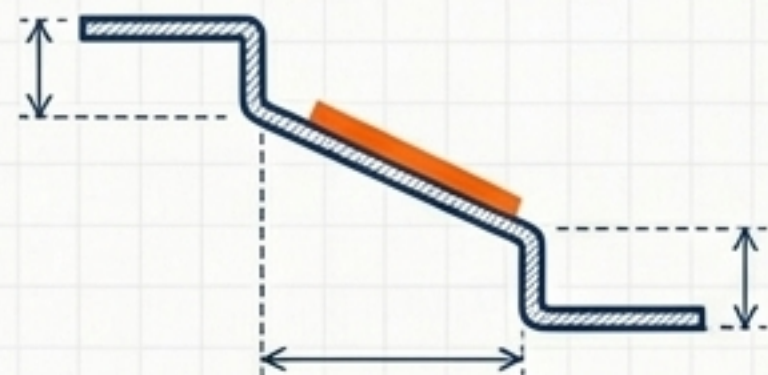
壁面の一部の傾斜面により、**段部間隔を容易に同一に**できれば足りると解釈。



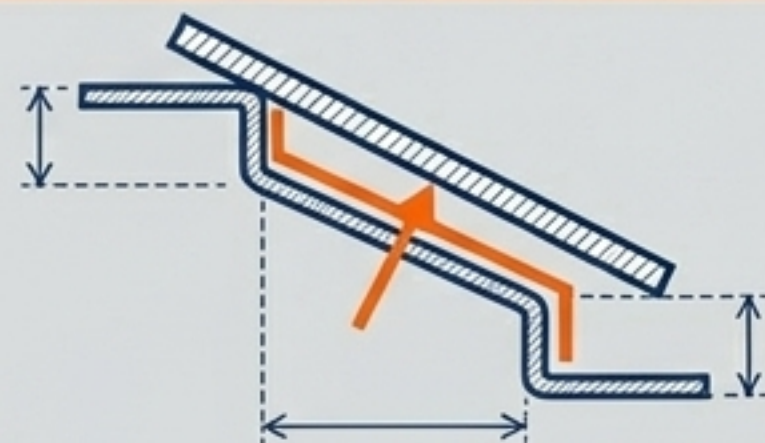
# 知財高裁の論理：変形例記載がもたらした実施形態限定の回避

## Blueprint Note

明細書 [0027] の力：「実施形態どおりの上部傾斜面となっていなくとも、同一プレートを掛け渡せるよう奥方に延びるように形成されていればよく、その形状は任意である」



**物理的形状の確認**  
一部の斜面であっても存在するか

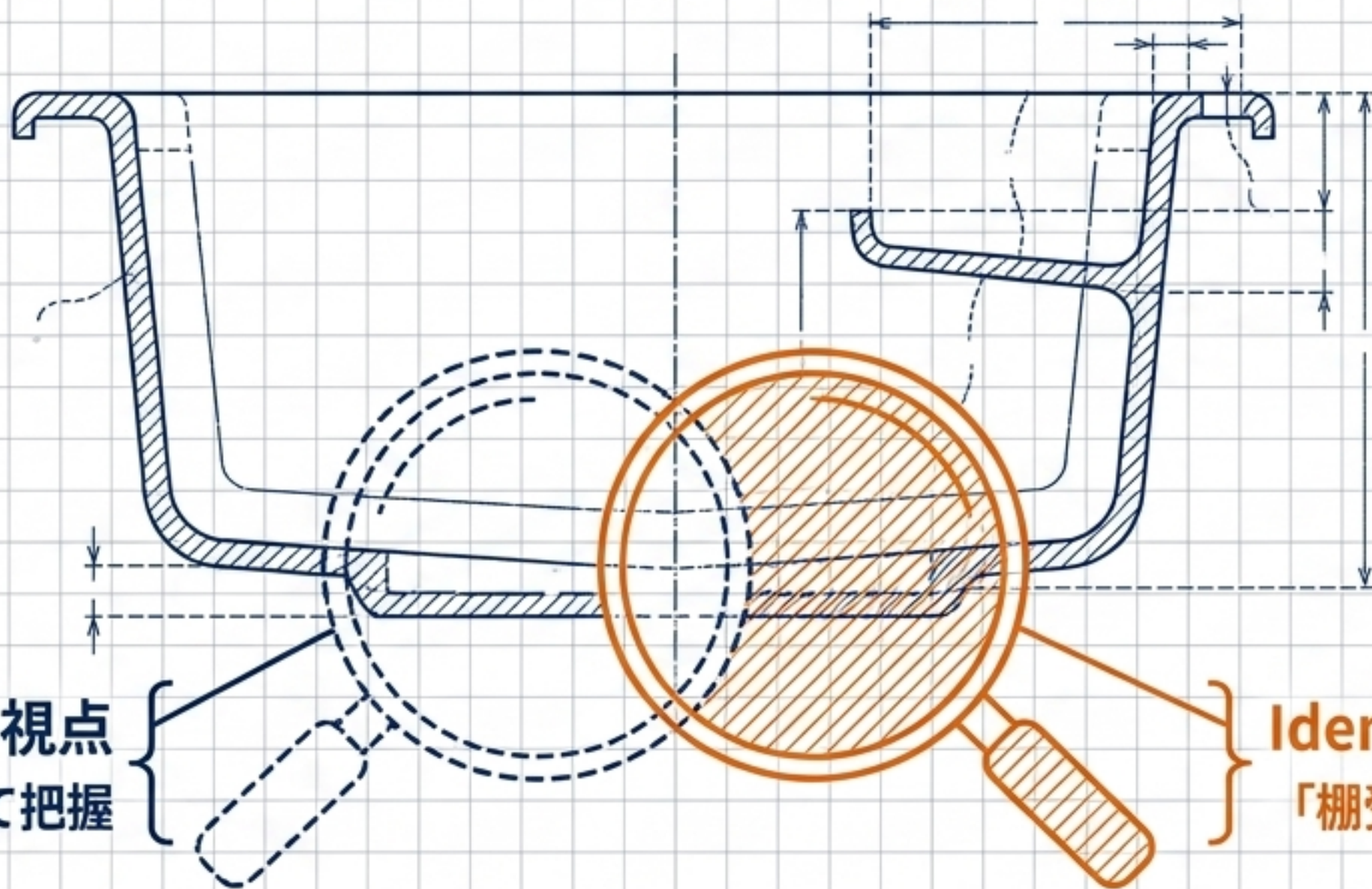


**課題解決機能の重視**  
特許法70条1項・2項に基づく解釈。純粋な幾何学形状ではなく「同一プレートを選択的に掛け渡す」機能を実現しているか

## 文言侵害の成立

段部間隔を同一にする機能を果たしていれば充足する

# 部材名称の相対性：「棚受け」は「壁面」になり得るか

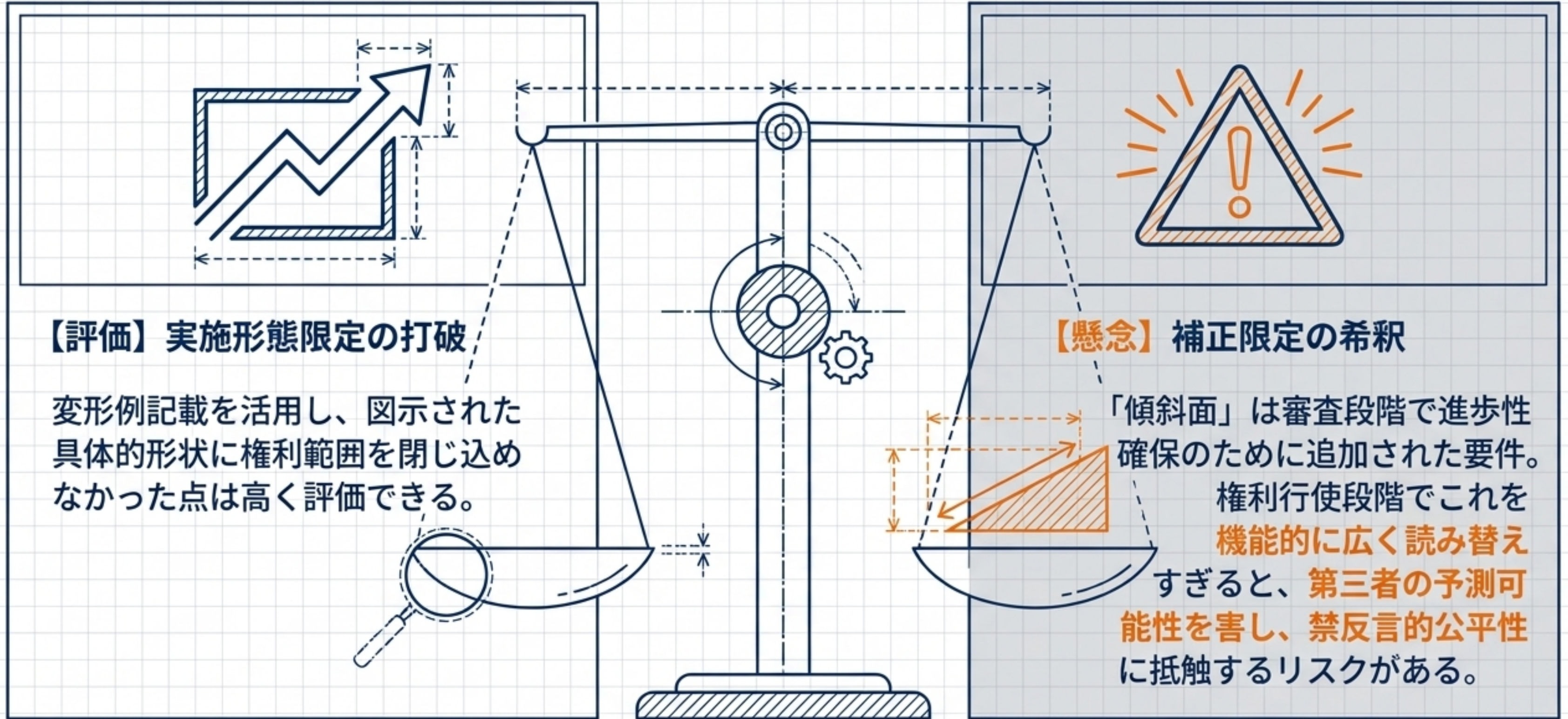


**Identity A: 構造的視点**  
「壁面の一部」として把握

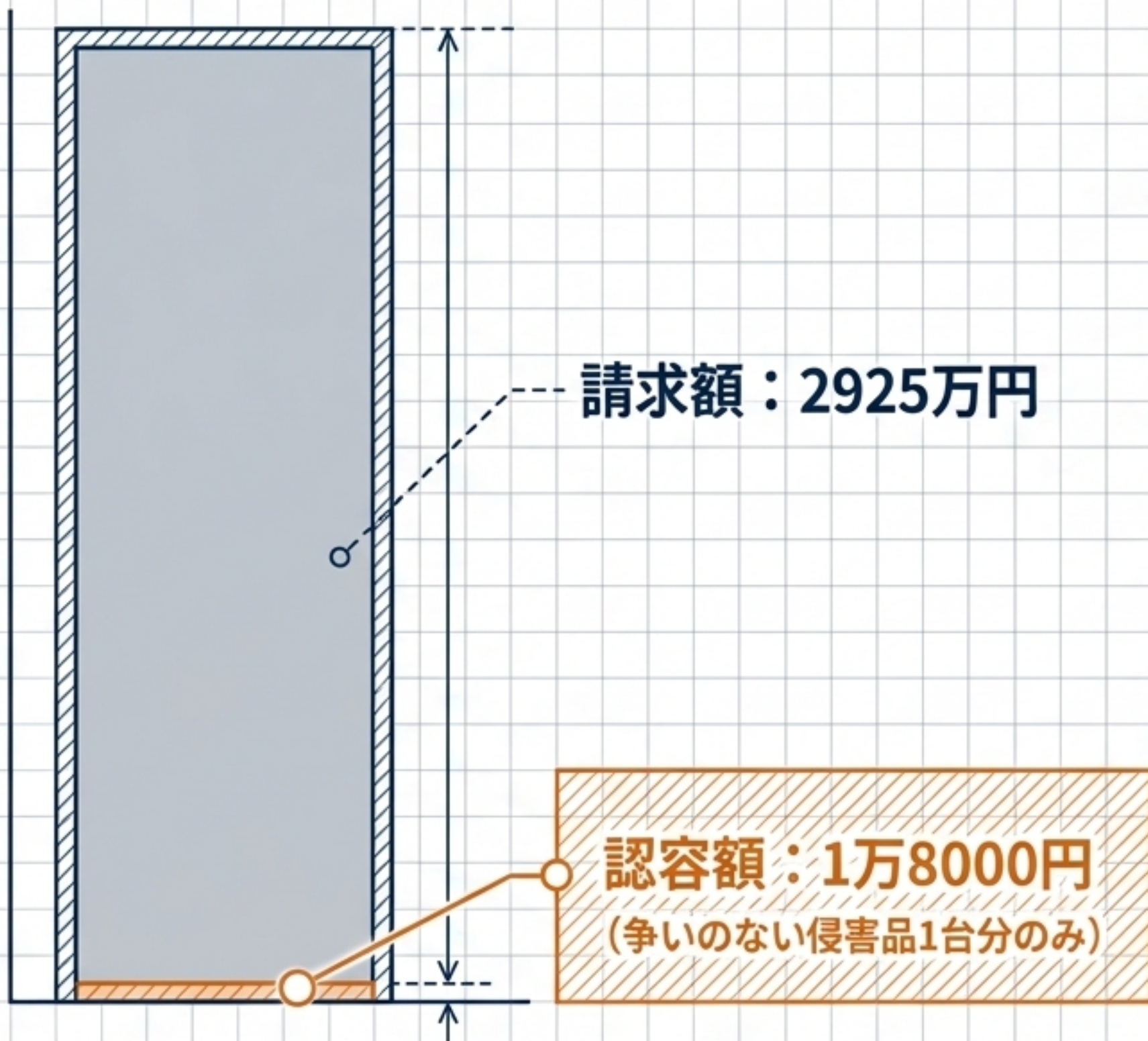
**Identity B: 機能的視点**  
「棚受け」として把握

被告の主張	「リブ下面は棚受けであり、壁面ではない」
判決の応答	単一の機能名称に排他的に固定することを拒否。棚受け機能を有する部分の下方部分も、特許請求の範囲における「壁面」の形状特定として評価可能。実質的な構造・機能・位置関係が名称に優先する。

# 判決の二面性：柔軟な文言解釈がもたらす光と影



# 勝訴の代償：侵害認定と損害立証の厳しいギャップ



侵害論では権利者に有利な結論を導いたが、損害論では被告製品の販売台数・利益額の立証不足で請求棄却。

## 実務上の教訓

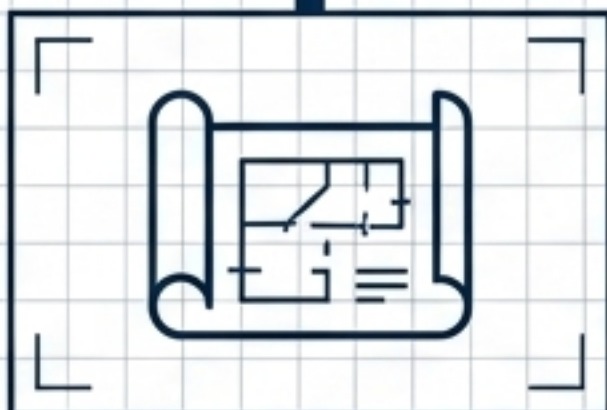
複合的製品（システムキッチン等）において、対象部品（シンク）が全体商品の販売にどの程度寄与したかの立証は極めて困難。販売資料、市場代替性の早期収集が必須。

# 戦略的プレイブック（前編）：出願と審査の最適化



## 出願時（明細書作成）

変形例を定型句（「形状は任意である」等）で終わらせない。全面傾斜、一部傾斜、垂直面併存などを具体的に列挙し、それぞれが課題を解決する理由を記載する。



## 出願時（クレーム）

発明の本質を見極める。「少なくとも一部が」「前後間隔を調整するように」など、範囲と機能を意識したし語を選択する。

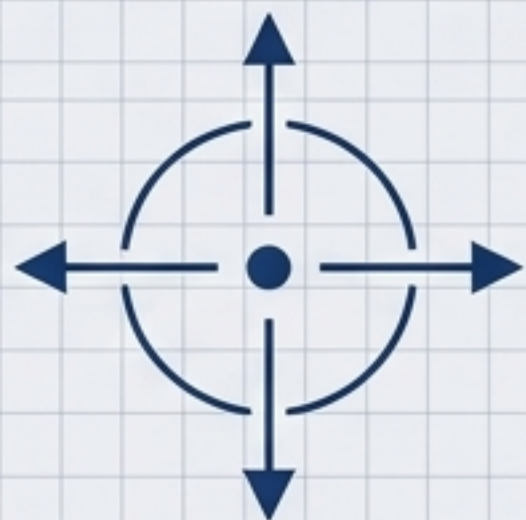


## 審査段階

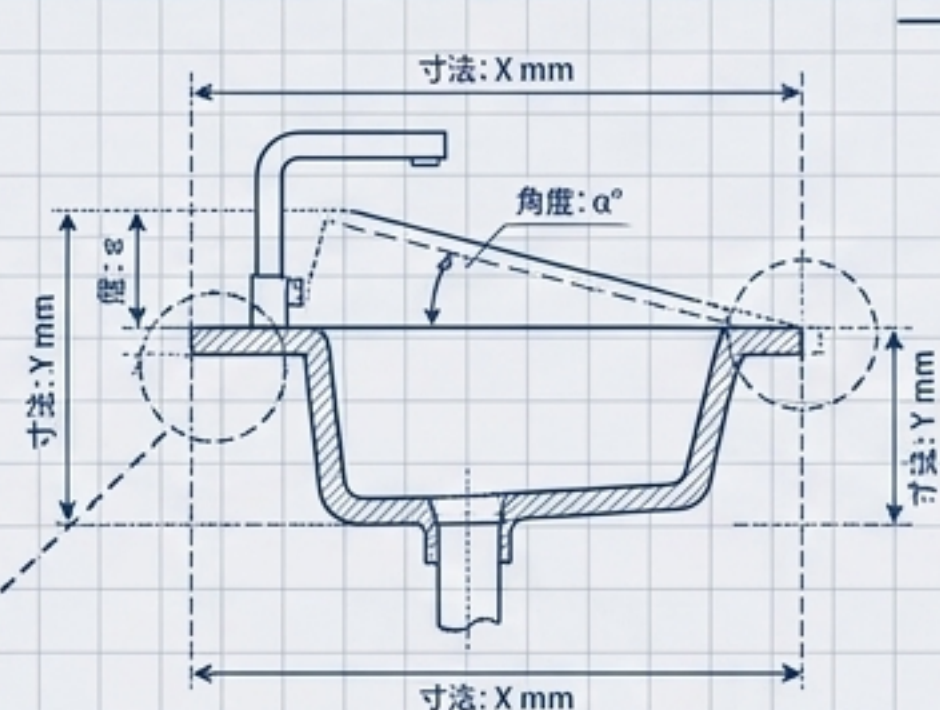
意図せぬ限定を避ける。進歩性主張のために強調する効果が、**将来の権利行使時に過度な限定根拠（包袋禁反言）**とならないよう、主張と将来の権利範囲を整合させる。

# 戦略的プレイブック（後編）：権利行使と防御の戦術

## 権利者側（侵害立証）

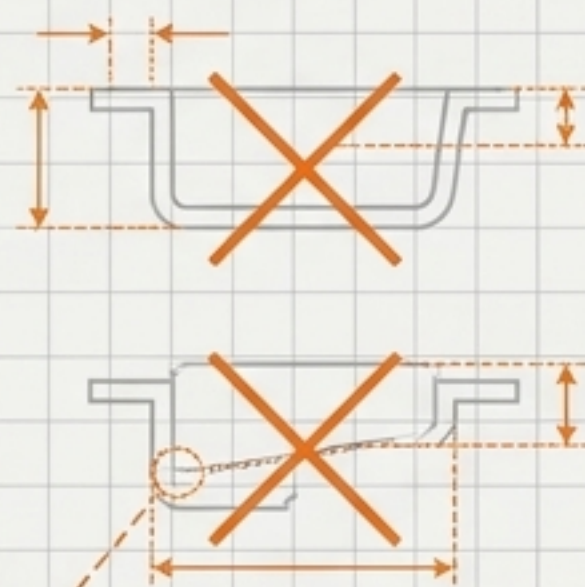


被疑製品の微小な構造差であっても、それが特許の「課題解決機能」に寄与していることを立証する。寸法図、断面写真、物理的な機能試験（プレート載置試験等）を駆使する。

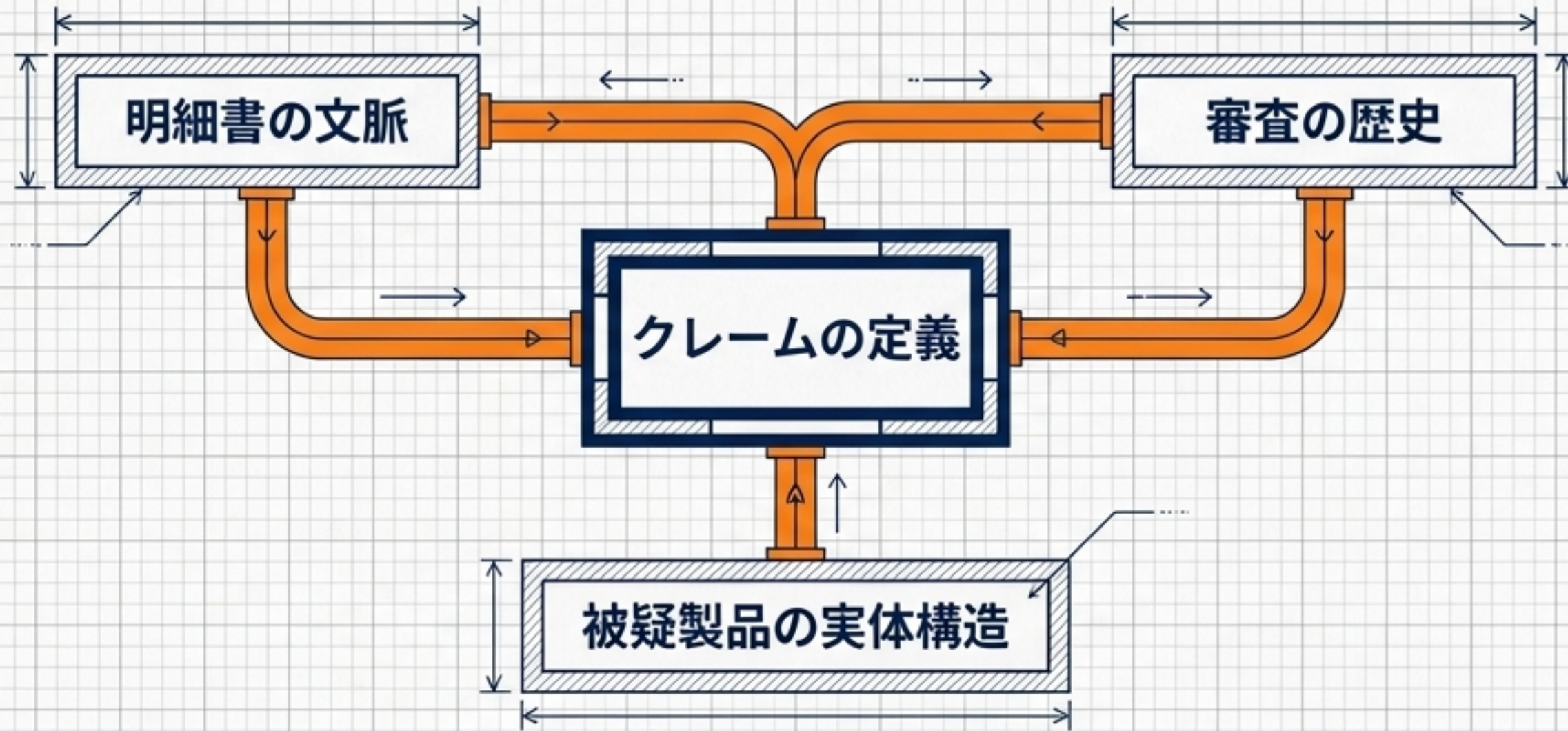


## 被疑侵害者側（非侵害主張）

単に「形状が違う」「名称が違う（棚受けである等）」と主張するだけでは不十分。形状の量的・質的相違が、特許発明の技術的意義（機能）を本質的に果たしていないことを立証する。



# 結論：技術的境界の動的メカニズム



- 「傾斜面」という一見明確な幾何学用語であっても、その境界は静的なものではない。
- クレームの一語一句は、明細書の全体的文脈、審査の歴史、そして目の前にある被疑製品の实体構造との相互作用によって初めて定義される。
- 特許実務家は、出願の初日からこの動的メカニズムを設計しなければならない。